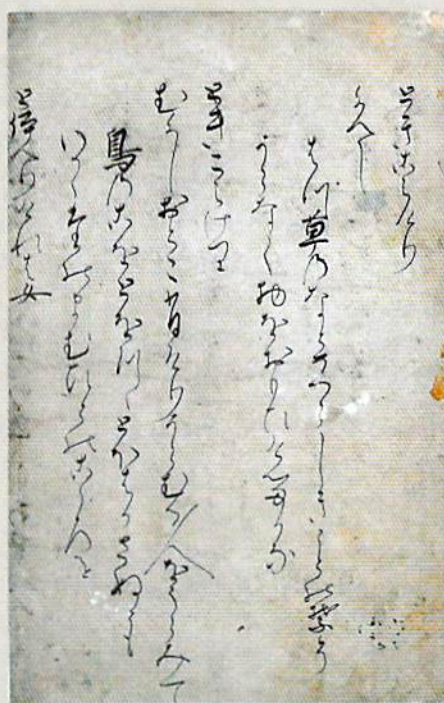


大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.19
SPRING 2010



『伊勢物語』断簡

目次

●メッセージ	
法人化後第1期から第2期へ	今西祐一郎 1
国文学研究資料館とコロンビア大学の協力協定の意味	ハルオ・シラネ 2
●研究ノート	
国文学研究資料館蔵古筆手鑑2点の紹介 その1	久保木秀夫 3
中近世における古代寝殿造理解-理想の住宅像と考証研究-	赤澤真理 6
●トピックス	
日本文化とロラン・バルトのフォトバイオグラフィー	ファビアン・アリバート・ナルス 9
公開開始 与謝野晶子の源氏訳自筆原稿画像データベース	伊藤鉄也 10
研究集会「アーカイブズ編成の理論と実践」の開催	坂口貴弘 11
当館所蔵「春日懐紙」の重文指定について	12
平成22年度展示会・講演会等	13
平成22年度アーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会通算第56回)の開催	13
総研大日本文学研究専攻の近況	中村康夫 14
表紙絵紹介	14

法人化後第1期から第2期へ

今西 祐一郎（国文学研究資料館 館長）

国文学研究資料館の創立30周年記念の祝賀会が、松野館長時代に行われたのは、ついこのあいだのような気がしていました。当時、館外にあって何かの委員を引き受けていた私も、出席した記憶がはっきりしているからです。しかし、それは平成14年のことなのです。ということは、再来年の平成24年には、もう40周年を迎えるということです。

しかし、10周年、20周年といった創立以来の自然な時間サイクルとは別に、法人化以後は、一期6年をサイクルとする中期計画・中期目標という時間が、大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国文学研究資料館の運営を支えています。

平成22年度に第2期を迎えるにあたって、評価委員会では早くから第2期中期計画・中期目標の策定にむけて素案を練り、第2期目標・計画には、たとえば、次のような文言を盛り込みました。

研究の進展に即し、研究者コミュニティの意見を踏まえ、それぞれの対象領域におけるナショナルセンターとして、共同研究及び他機関と連携した共同研究を組織するための体制を柔軟に整備する。

国文学研究資料館においては、共同研究を機能的に実施するため、研究系を統合し研究組織の改編を行うほか、海外研究者を共同研究委員会の外部有委員に加えることにより、国際的な研究動向に対応した研究体制を強化する。

法人化を迎えた6年前から、国文学研究資料館は研究組織を4研究系、すなわち文学資源研究系 文学研究形成系

複合領域研究系 アーカイブス研究系に分ち、系ごとに研究統括の主幹をおいて、基幹研究、プロジェクト研究、共同研究等を推進してきました。第1期の6年目を終えるに当たり、合計13の研究プロジェクトは、それぞれ研究成果の刊行、展示等で満足すべき結果をあげたと自負しています。と同時に、4研究系縦割りシステムの問題点も徐々に明らかになってきました。

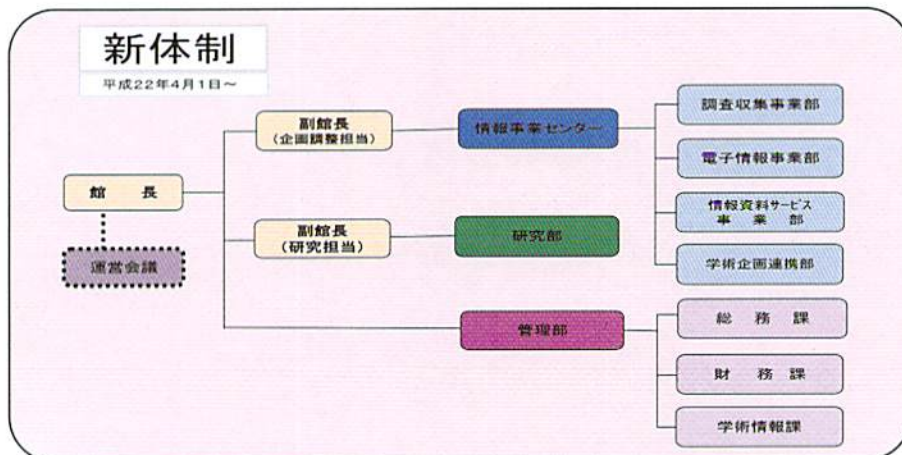
将来計画委員会では、はやくよりその点に注目して検討をかさね、第2期中期計画・中期目標の策定に当たっては、4研究系の統合一本化をはかり、より柔軟な研究体制の構築を期すことにしました。

また、法人化以後、同じ人間文化研究機構の他機関との連携という、以前にはなかった重要業務が加わり、館内外の業務の増加・多様化は著しく、その業務の多くを実質的に担う副館長の激務は予想を超えるものがありました。

そこで、今回の組織改編を機に、副館長を一人増やし、企画調整担当、研究担当の副館長二人体制で館の運営に当たることにしました。新たな研究組織、運営組織を図示すれば、次のようになります。

なお、4研究系の解消に伴い一人減った3人の主幹は、これまでのような研究系にとらわれることなく、館長、副館長のもとで柔軟な研究体制の構築と統括を分担します。

物事に完璧ということはありません。第1期の実績と反省とを踏まえ、第2期に踏み出します。これまでに変わらぬ、館内外のご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。



国文学研究資料館とコロンビア大学の協力協定の意味



ハルオ・シラネ
(コロンビア大学 教授)

2009年の3月に国文学研究資料館とコロンビア大学は研究・教育の交流に関する協力協定を結びました。北アメリカの研究機関としてはじめて、国文学研究資料館と公式の協定を締結したことになります。コロンビア大学はドナルド・キーン教授や故エドワード・サイデンステッカー教授をはじめとして、欧米における日本文学研究の先駆者がプログラムを築き、その後現在にいたるまで、アメリカ合衆国内外の各地で日本文学の研究・教育活動に携わっている博士号取得者を数多く育成してきました。コロンビア大学は北アメリカにおける日本文学研究の拠点であり、また、メトロポリタン美術館、ニューヨーク公立図書館、パークコレクション、ウェーバー・コレクションなど、海外の主たる絵巻、屏風絵、版本などのコレクションが存在するニューヨークに位置していますので、多くの点で、国文学研究資料館とその諸活動、特にニューヨーク公立図書館のスペンサー・コレクションに関する研究にとってよいパートナーといえるでしょう。私たちはワークショップやシンポジウムの共催を計画していますが、それらは単に国文学研究資料館とコロンビア大学のメンバーを連携させるばかりでなく、国際的研究活動の拠点を作ることによって日本や北アメリカ・ヨーロッパの諸大学や美術館の研究者の相互交流がさらに進むことにもなるでしょう。研究の方法が大きく異なる日本と海外の研究者、殊に若い研究者を含んだ相互交流を可能にするような、お互いに刺激的な企画を展開することを望んでいます。シンポジウムの計画にはバイリンガル版での出版予定も含まれていますので、こうした相互交流の成果をより広く伝えることもできるでしょう。

将来における共同研究の重要な鍵のひとつは、それが学際的であり、文学研究者ばかりでなく、宗教史や美術史をはじめ、さまざまな領域の研究者たちも含まれるということだと思います。今日、アメリカ合衆国では、文学研究はテキスト分析を越え、視覚文化、メディア、印刷文化、パフォーマンス、儀式に関する研究も含んだものへと広がっています。詩歌、散文、劇を中心とする

十九世紀西洋の文学概念の枠組が広がり、ポピュラーカルチャーやマルチメディアなどの歴史的研究も研究対象として浮上してきました。また、私たちは、東アジアの「文」(人文学)という、より広い概念も活性化させたいと考えています。こうした志向によって、今回の国文学研究資料館とコロンビア大学との研究・教育協定は、東西の異なる分野の研究者たちを新たに結びつけることにもなるでしょう。

文学テキストやそれに関連するメディアは、物事がどのようなようであったかだけでなく、どのようにあるべきか、あるいはどのようになるかもしれないか、何に直面し何を避けるべきなのかといったことを、それを産み出し享受した人々に語りかけてきたのだと思います。「物事がもしこのようなものだったら、その結果は…」とでも言わんとするように、文学はよく仮定法になっています。この意味で、わたくしたちは文学を通して人生や社会において実際とは異なる可能性を試してみることができるのです。文学はまた、現実からの逃避の方法、現状強化の手段、現状打破の手段、現状批判などとしても機能してきました。私は国文学研究資料館とコロンビア大学との協定によって、日本文学が歴史的に果たしてきた、このような文化的・社会的な諸機能をより深く理解できるような研究が進むことを期待しています。

ハルオ・シラネ コロンビア大学教授 (日本文学・文化)

日本語での著書に『夢の浮橋:源氏物語の詩学』(中央公論社)、『芭蕉の風景、文化の記憶』(角川書店)、編著に『創造された古典:カノン形成、国民国家、日本文学』(新曜社、共編)、『講座源氏物語研究:海外における源氏物語』(おうふう)、『越境する日本文学研究、カノン形成、ジェンダー、メディア』(勉誠出版)などがある。

国文学研究資料館蔵古筆手鑑 2 点の紹介 その 1 (請求番号ラ 3 - 27)

久保木 秀夫 (鶴見大学専任講師 前国文学研究資料館助教)

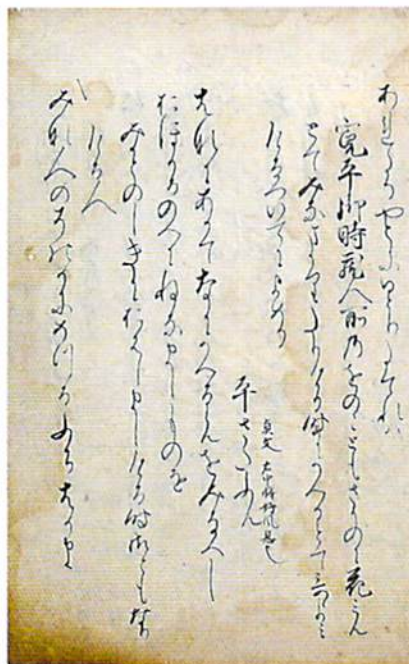
2007 年度から 2008 年度にかけて、国文学研究資料館に 2 点の古筆手鑑が収蔵された。これまでに収蔵もしくは寄託されてきた古筆関連資料の中に、古筆手鑑の実物は含まれていなかったもので、立て続けに 2 点も所有できたのは、まことに慶ばしい限りである。うち 2007 年度購入の 1 点 (ラ 3 - 27) については、先に国文研ニュース No. 13 においてごく簡潔に紹介したが、字数制限もあり、図版掲載できたのは後掲の断簡 G のみだった。あるいは国文研 2009 年度調査研究シンポジウム「王朝文学の流布と継承」のチラシ余白で、断簡 A を図版と共に紹介したこともあったが、配布先は限られていたので、周知され得たわけでもなかった。そこで 2008 年度購入の 1 点 (99 - 136) と併せ、あらためて本稿において取り上げ、特に注目される断簡いくつかを紹介していくことにしたい。なお図版掲載を最優先とし、各断簡に関する記述は必要最小限度にとどめる。掲載は貼付順。紙幅の都合上、本号 (ラ 3 - 27) と次号 (99 - 136) の 2 回に分けること、及び図版の縮小率が均一でないことをお許し願いたい。

古筆手鑑 (ラ 3 - 27) 36.1 × 24.0cm 折帖 1 帖 全 12 折 オモテ 39 葉 ウラ 37 葉

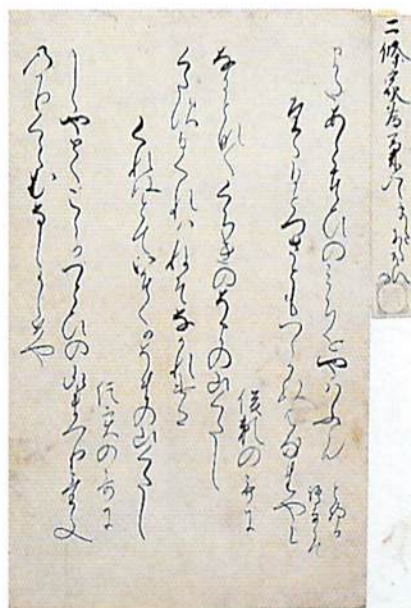
A 古今集 極札欠 楮紙 25.2 × 16.1cm 鎌倉時代中期写

古筆学大成 4 「伝藤原家隆筆古今集切 (三)」に掲載され、田中登氏「古今集の古筆切」(『古今和歌集研究集成』所収、2004 年、風間書房) によって「異本歌を持っている点に注意」と指摘されている合計 3 葉のツレ。当該断簡が頗る

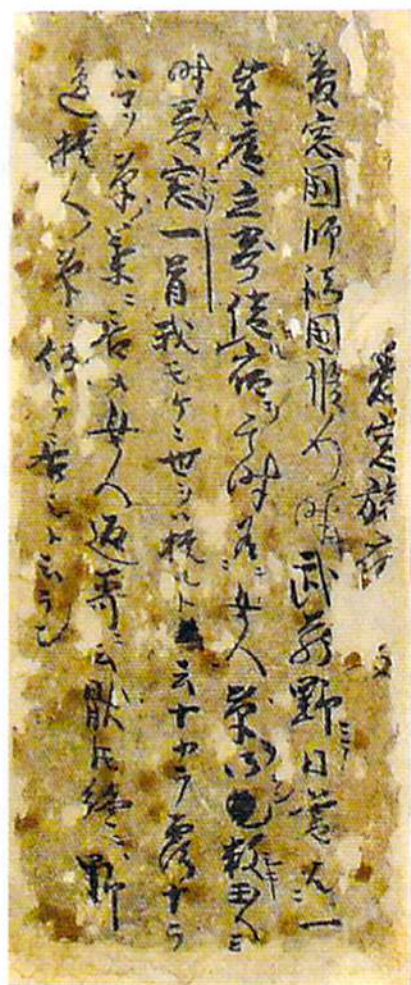
注目される理由は次の 2 点。① 1 ~ 2 首目 (巻 4・秋上・237 ~ 238) に続く 3 首目「みな人の…」(歌頭右肩に朱墨合点あり)と、裏うつりによって知られる 4 首目「折る人の…」とが、数ある古今集伝本の中でも当該断簡のみが持つ異本歌であるらしいこと。この 2 首は大和物語 153 段における「さがのみかど」と「ならのみかど」の贈答歌だが、詞書もまたそれとは異なる独自内容となっている。② 裏うつりの 4 首目詞書「御返し」に「聖武天皇也」という注記があること。この歌の作者の「みかど」を聖武天皇に比定するのは珍しい説のようである。



B 未詳歌書 伝二条 (京極) 為兼筆 楮紙 24.4 × 15.1cm 鎌倉時代末期写
まず歌を挙げ、次いでそれを証歌としている句 (作者未詳) を紹介していく内容か。句の方は、とある歌の上句か、あるいは連歌のうちの 1 句か。連歌関係書とすると、現存資料中かなり古いのではなかろうか。ツレは杉谷寿郎氏蔵古筆手鑑所収の 1 葉のみか。

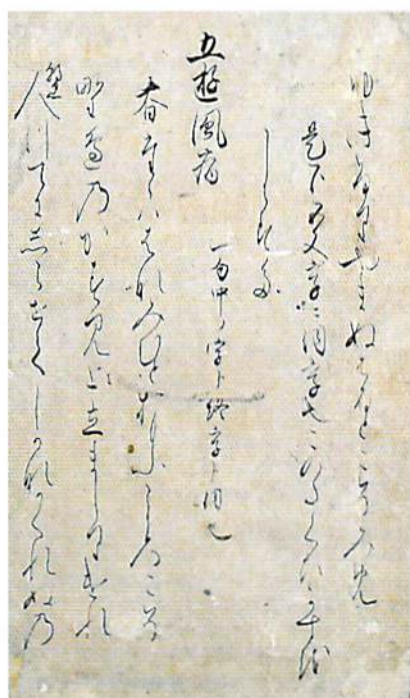


C 未詳説話集 極札欠 楮紙 23.2 × 9.9cm 室町時代後期写



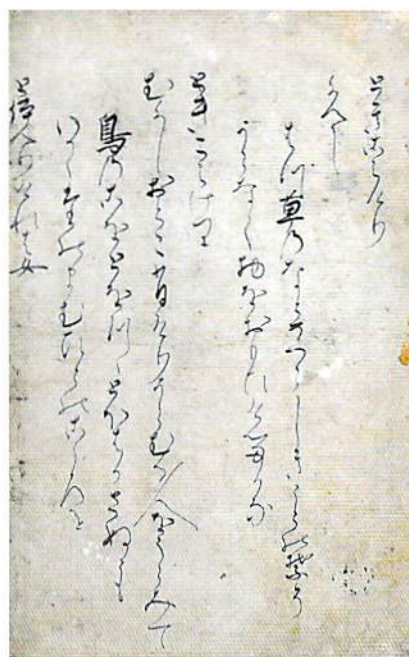
「夢窓国師」が修行中、武蔵国の旅宿において「女人」と贈答歌を交わしたという説話を伝える。「我モケニ世ヲハ捨ルト云ナカラ露ナラハコソ草ノ葉ニ居メ」（夢窓）「獣トモ終□野辺ニ捨□草ニ何トテ居レト云ラン」（女人）というその贈答歌は、新出の夢窓伝承歌のようである。

D 八雲御抄 極札欠 楮紙 22.7 × 14.6cm 鎌倉時代後期写か
巻1「七病」。ツレ未確認。



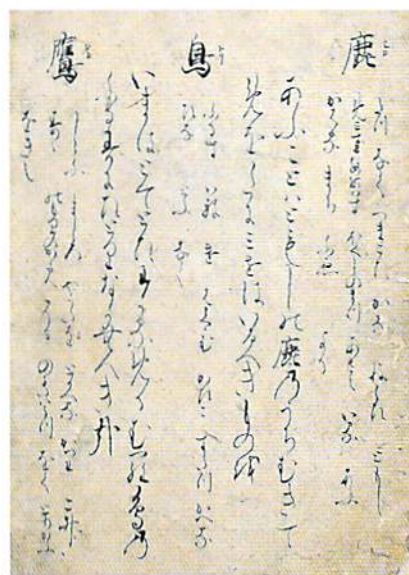
E 伊勢物語 極札欠 楮紙 24.0 × 15.0cm 鎌倉時代前期写か

通行本の49～50段。2首目「鳥のこを…」の下句「いかたのまむひとのころを」は、いわゆる塗籠本（伝民部卿局筆本を實質上の孤本とする）のみが有する独自異文と一致する。ただし塗籠本が直後に掲げる「しらつゆをけたてちとせはありぬともいかたのまむ人のころお」という1首（後人が古今六帖から補ったかと推定されている）の方は、当該断簡には見られない。あるいは当該断簡は、塗籠本の生成過程を物語る重要資料となり得るか。もっとも「鳥のこを…」と「しらつゆを…」との下句が同一である点、書写時の目移りだった可能性もあろうか。いずれにせよツレの博搜が必須の課題。



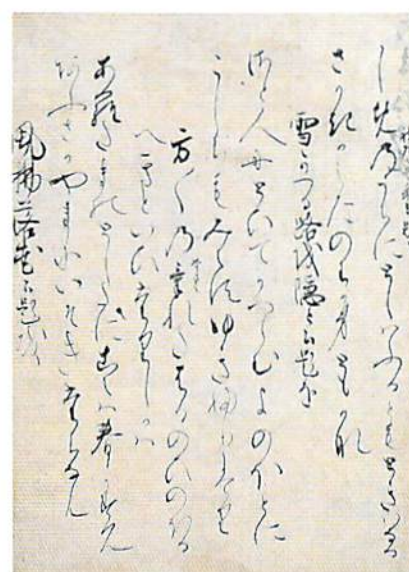
F 和歌初学抄 極札欠 楮紙 24.9 × 15.8cm 鎌倉時代前期写か

古筆学大成24「伝藤原清輔筆和歌初学抄切」1葉のツレ。「秀句」のうち「鹿」～「鷹」。日本歌学大系の本文と比較するに、各項目下の歌語例に相応の異同あり。



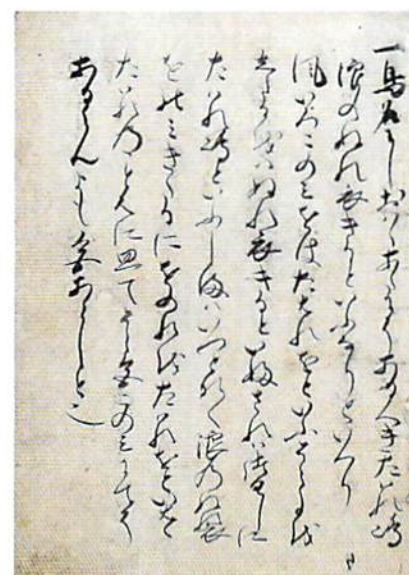
G 賀茂成助集 極札欠 楮紙 19.3 × 14.0cm 室町時代前期写

賀茂成助集は平安時代後期成立の散佚私家集。これまでたった1葉のみが知られていた伝後光厳院筆断簡のツレ。国文研ニュースNo.13にも図版掲載。新編私家集大成にも収録済み。



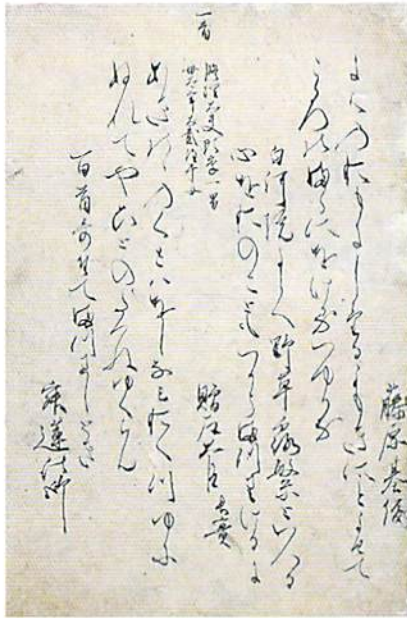
H 和歌知頭集 極札欠 楮紙 23.4 × 15.7cm 鎌倉時代後期写

古筆学大成23「伝寂恵筆和歌知頭集切」1葉のツレ。伊勢物語の注釈書たる和歌知頭集の本文は書陵部本と松平文庫本とに大別される。当該断簡の本文は書陵部本にはほぼ一致、ただし小異も確認し得る。



I 新古今集 極札欠 楮紙 24.4 × 15.5cm 鎌倉時代中期写

巻5・秋下・467～469。勘物を持つ新古今集の写本は比較的珍しいか。ツレ未確認。ちなみに伝甘露寺光経筆八坂切とは別種。



のいわゆる刀伊の入寇と、太宰大貳としてそれに立ち向かう道隆4男隆家の姿を描いた場面。ツレの存在を聞かない稀観の1葉。

K松花集 極札欠 楮紙 26.0×9.9 cm 室町時代後期写

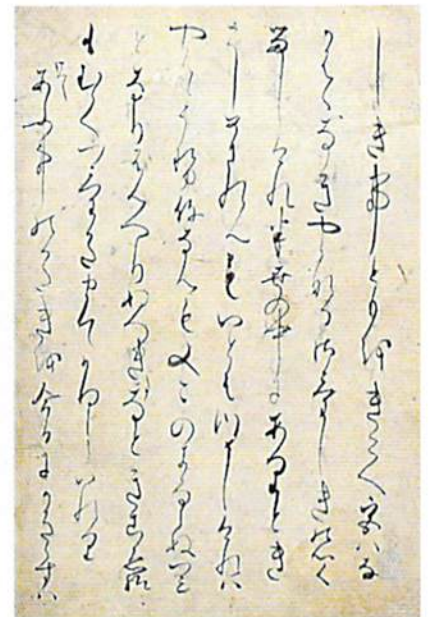
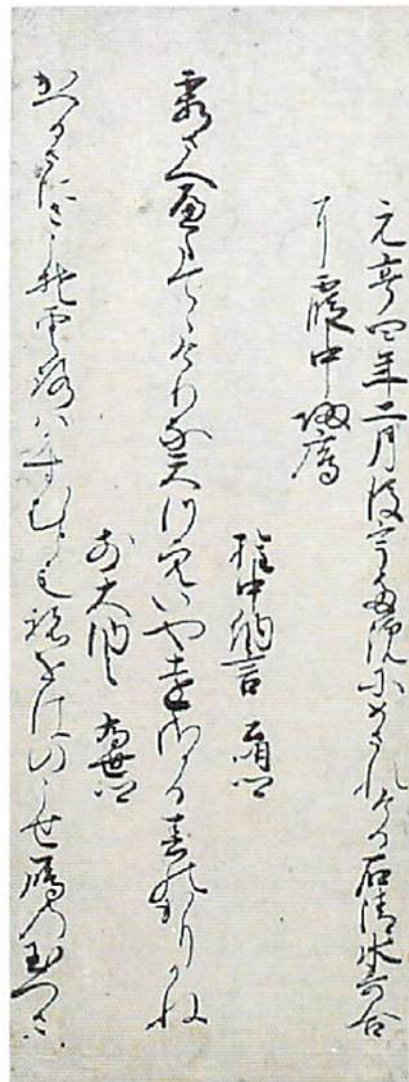
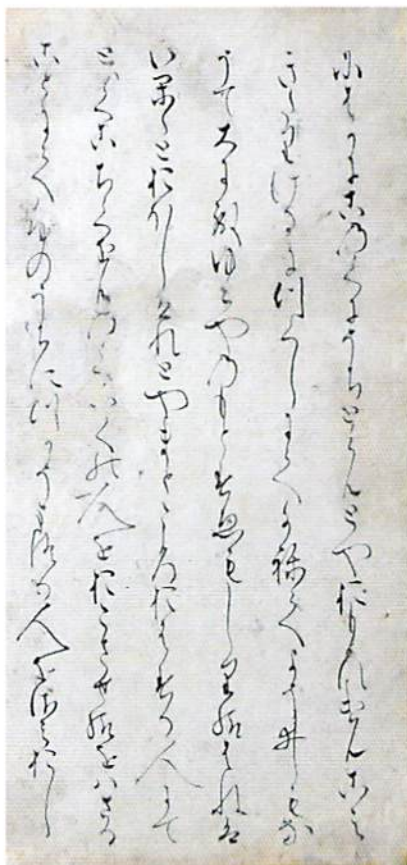
松花集は鎌倉時代末期成立の残欠私撰集。数種類の残簡・断簡が伝わるうち、伝正広筆断簡のツレ。当該断簡記載本文について新編国歌大観を検するに、1首目の詞書・作者名と2首目の歌とが合わさって巻1・春・19として載っており、1首目の作者名「権中納言公明卿」と歌「霞さへ…」とが見出されないことが知られる。この「霞さへ…」の歌は確かに、元亨四年二月石清水社歌合・14番右で「藤

原朝臣公明」によって詠まれているので、新編国歌大観春部の底本（賜廬拾葉本、伝浄弁筆残簡を転写した由）における誤脱であると判断されよう。すなわち既存の本文の不備を補う1葉として、当該断簡は大変貴重ということになる。なお国文研ニュースNo.13において、当該断簡を「南北朝期私撰集たる藤葉集」の1葉と紹介してしまったのは、稿者の記憶違いによるミスである。ここに訂正しておきたい。

L源氏物語 極札欠 楮紙 21.3×14.6 cm 鎌倉時代後期写

賢木巻。古筆学大成 23「伝津守国冬筆源氏物語切」3葉のツレ。

J大鏡 極札欠 楮紙 25.1×11.7cm 鎌倉時代中期写 卷4「内大臣道隆」。寛仁3年(1019)



以上、多く極札を欠いており、名物切も皆無に等しく、台紙もくたびれている当該古筆手鑑は、確かに体裁としては2級以下、と言うのが適当かもしれない。しかしその資料的な充実度は、第1級とされている既知の古筆手鑑にも十分比肩し得るであろう。それにしても全80葉にも満たない中に、これだけの重要資料・稀観資料が含まれている古筆手鑑というのは、なかなかお目にかかれないのではなからうか。国文研が収蔵するのに実に相応しい1点であった。

中近世における古代寢殿造理解 —理想の住宅像と考証研究—

赤澤 真理（日本学術振興会特別研究員 SPD・国文学研究資料館）

■はじめに

歴史的にみると、住宅の役割は住むことにとどまらず、居住者の身分や権威、あるいは財力の誇示にあった。

『源氏物語』の舞台である「寢殿造」の空間は、後の中近世に降っても、理想的な住空間としてそのイメージが共有されていた。

17世紀前半に建てられた、京都の桂川沿いに建つ桂離宮は、八条宮智仁・智忠親王が、『源氏物語』の世界を読み込むことで造営された別荘建築である。親王が月見台から月を眺め、詩歌を詠んだ別荘であり、客人が訪れた際には、庭に点在する茶屋で茶がふるまわれ、桂川や園内の池での舟遊び、管弦が催された（図1）。



図1 桂離宮 月見台



図2 京都御所 紫宸殿

18世紀後半には、朝廷儀式の再興を目指し、天皇の住まいである内裏の儀式空間が平安時代の様相へ復古造営された。

立面や構造には、近世の建築技術が援用されたが、考証を担当した故実家・裏松固禪は、古代・中世の文献史料や絵画を渉猟し、平安時代の正確な復古を目指した（図2）。

近世の人々は、時を隔てた古代の寢殿造をいかに理解し、どのような姿として共有したのか。私はこの点を、近世に制作された源氏物語絵などの王朝物語絵に示された住空間表現を通して究明してきた^{*1}。以下、これまでの研究を簡単にご紹介したい。

■寢殿造の空間

「寢殿造」は、近世に成立した造語であり、天保13年(1842)に会津藩の国学者であった沢田名垂が著した最古の日本住宅通史『家屋雑考』に初見する。現在では、階層により幅があり、年代により大きく形態を変容させた平安時代貴族住宅を「寢殿造」という一つの名称で定義づけることには、もはや限界が生じていることも指摘されているが、ひとまず平安時代貴族住宅について「寢殿造」の呼称を使用する。

寢殿造の空間は、主となる母屋の四面に、廂が巡り、さらに孫廂が付属する。柱は丸柱であり、床は板敷に置畳、白壁で囲まれた塗籠以外に、固定的な間仕切りは少なく、几帳や屏風で室内を仕切った（図3・図4）。



図3 寛政度内裏清涼殿平面図
(18世紀後半の復原)



図4 京都御所清涼殿

上流階級の住宅は、時代が降るにつれ、日常的な空間から、建具で間仕切られようになり、母屋・廂の構成が消失し、柱が角柱になり、畳が敷詰められるようになる。さらに、床・棚・書院・帳台構を備えた座敷飾が成立し、書院造が完成した。現在の和室の原型である。

その後、日常生活空間、遊興のための施設において、



図5 修学院離宮中御茶屋客殿

書院造の空間に、座敷飾を簡略化し、唐紙を刷った襖障子を用いるなどの自由な意匠を施した、数寄屋風書院造が登場し、内部空間の意匠が多様化していく(図5)。

■源氏物語絵の変遷にみる住空間の変容

寝殿造の空間を理解するために、12世紀に制作された『源氏物語絵巻』(徳川美術館・五島美術館蔵)及び『年中行事絵巻』(田中家蔵)は頻繁にとりあげられる史料である。

徳川・五島本『源氏物語絵巻』に描かれた住空間をみると、屋根を省き、部屋全体を斜めから俯瞰する「吹抜屋台」と称される手法によって描かれている。絵画をみるだけで、室内に居る登場人物達の様子が一目で分かるようになっている。絵には、母屋の周囲を1段低い廂が巡り、柱は丸柱、床は板敷に畳を置いた、寝殿造の様相が示されている。

その後、源氏物語絵は、12世紀だけではなく、19世紀まで描き継がれた。源氏物語絵の制作には、物語本文に立ち戻り、新たに図様を創出する方法と、前年代に描かれた絵を踏襲し、それにアレンジを加え新たに制作する方法の二種類があったとされるが、近世に至ると後者の方法が大部分となる。

ここで、源氏物語絵に描かれた建築空間に目をむけると、『源氏物語』は古代の貴族社会を主題としており、絵に表現された住宅は、時代が降っても、古代の寝殿造の様相が描かれるはずである。17世紀に制作された源氏物語絵をみてみよう(図6)。「若菜下」柏木邸にて、柏木が女三の宮の形見として預かった唐猫を愛玩する場面である。

床一面に畳が敷かれ、男性(柏木)の背後に金碧の屏風を置き、柏木の居所と女房達の居所を仕切る襖障子は、金地に漢画風の雉が描かれる。

古代寝殿造の空間は、床は板敷で、金碧の屏風は登場しておらず、紺青引の下地にやまと絵を描いた。近世源氏物語絵は、金碧の障壁画・敷き詰めた畳などの当時の上流住宅における格式表現を選択することによって、高貴な上流住宅を表現している。

さらに、17世紀半ばの源氏物語絵をみてみよう。「帯木」、光源氏が方違えで訪れた紀伊の守の邸で、光源氏が

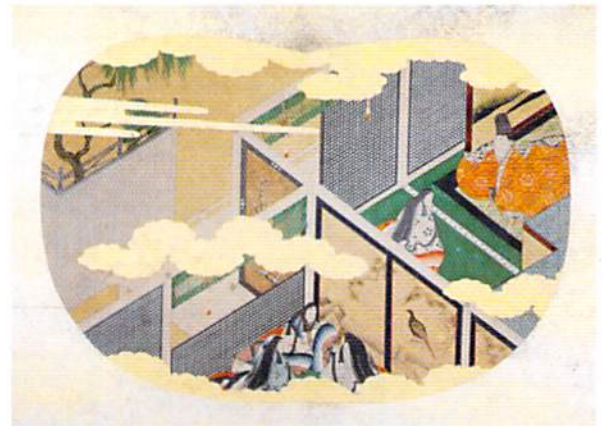


図6 『源氏物語団扇画帖』「若菜下」(国文学研究資料館蔵)



図7 『源氏物語絵巻』「帯木」(茶道文化研究所旧蔵)

歓待されている(図7)。ここでは、金碧の屏風は描かれず、室内は板敷で簡素な様相となり、庭の池や反橋を描きこんでいる。すなわち、当時の上流階級の平安貴族の暮らしぶりへの憧れ、風流な庭を見ながら歌を詠む、こうした生活様態への憧れが投影されている。

源氏物語絵に描かれた住まいは、当初は古代寝殿造の様相を示していたものが、古代から中世、近世へと描き継がれる間に、実際の上流住宅が変化すると、人々の上流住宅に対する空間理解に変容が生じ、絵に選択された様相も変遷する。近世源氏物語絵には、制作当時の人々が理想とし、憧憬をこめて鑑賞した上流住宅像が投影されていると考えられる。

■裏松固禪と寛政度内裏復古造営

年代が降り18世紀後半の源氏物語絵になると、古代中世の文献や絵画を参照することで、古代寝殿造への正確な復古を目指すようになる。

その画期となったのが、寛政度内裏復古造営である。現在も京都御所として現存する、天皇の住まい(内裏)は、近世を通じて8度の造営を繰り返した。このうち7・8度目の寛政度・安政度の内裏においては、紫宸殿・清涼殿・飛香舎などの儀式用の建築が平安時代の復古様式で建てられた。この際に考証を担当したのが、京都の公家・裏松固禪である。

裏松固禪は、尊王思想家との交流により、幕府に30年の蟄居を命じられるが(宝暦事件)、その間『大内裏図考証』(内裏に関する殿舎考証)『院宮及私第図』(貴族邸宅に関する殿

舎考証)を編纂した*2。固禪の邸宅に対する研究成果は、高い評価を得て、江戸に居住する絵師や有職故実家において参照された。具体的には、幕府御用絵師であった狩野晴川院養信に引用され、復古的な建築表現による源氏物語絵が制作された。また、固禪の研究成果は、江戸に居住した国学者達に参照され、『源語図抄』『源氏類聚抄』(宮内庁書陵部蔵)などの『源氏物語』住宅考証書が制作されるようになる*3。

■ 18世紀以前における寝殿造理解 - 「十帖源氏」

近世における寝殿造観形成には、裏松固禪の研究が転換期となった。しかし、それ以前の時代に古代の寝殿造がいかに関与されていたのか、未だ不明な点が多くのごさされている。

たとえば、野々口立圃(1595～1669)が記した『十帖源氏』に所収された、六条院の図をとりあげたい。六条院は、『源氏物語』に登場する光源氏とその妻子達の邸宅であり、春・夏・秋・冬の庭を持つ四町で構成され、相互が渡殿で繋がれていた。六条院は、すでに『河海抄』などの中世の注釈書に考証がなされるが、『十帖源氏』は六条院を作図した比較的古い史料と位置づけられる。

『源氏物語』「少女」には、六条院造営の記述がある。辰巳町(東南)に源(源氏)、未申町(西南)に秋好中宮、丑寅町(東北)に花散里、戌亥町(西北)に明石の御方の邸宅を配置したとある(図8)。

『十帖源氏』の図をみると、東南に「源氏」、西南に「秋好中宮」、西北に「明石上」とあり、本文と一致している(図9)。しかし「花散里」の邸宅位置は、西側に寄せられている。

花散里の邸宅が西側に配された要因として、本図には、紫上・姫君・女三(宮)の住まいが描きこまれたためといえる。物語本文によると、紫上・姫君・女三の宮は源氏とともに、東南の町の寝殿・対に居住していた。しかし、図では紫上・姫君・女三(宮)は、源氏の邸宅からは遠く離れた北側に配置されている。

図が制作された当時は近世であり、妻子の邸宅は北側に配置された。すなわち近世における邸宅の共通認識(女性たちの住空間は北側にある)に基づき、源氏の邸とは別の北側に女性の邸宅を配し、花散里の住まいが、西側に寄せられてしまったものと考えられる*4。

その中で、細部には考証の成果がみられる。秋好中宮の邸宅前に描かれる築山と池は、「中宮の御町に、もとは山があり、植木・泉・滝をおとした」という記述を、東側の馬場と池は、「北の東に涼しげな泉があり」「東面に馬場殿」という記述を基にしている。

以上のように、細部に考証がなされるが、平面図のプランに落とし込んだ時に矛盾が生じている。作図からは、今日理解される寝殿と対から構成される寝殿造の規範像が共有されていなかった点が指摘できる。



図8 六条院復原図(池浩三氏)



図9 「十帖源氏」
(国文学研究資料館蔵)

■ おわりに

従来、近世における寝殿造研究は、「近世有職」と称され、不正確な理解に基づいた虚像とみなされがちであった。私はこうした虚像の考証水準と、それを生み出し支えた社会的要因を歴史的に検証していく必要があると考えている。今後は、絵画に示されたイメージ像に加え、物語注釈書・有職故実書・図面・建築遺構、個別の享受の実態など、中近世における寝殿造の理解を複合的に検討していければと思う。

歴史的な人々が物語や絵画を通して、いかに理想の住宅像を構築し、共有したのか。本研究は、前近代における理想の住宅イメージの形成過程を明らかにすることを意図する。それは今日に共有される日本住宅史観の根本を探り、今後の住環境のあるべき姿を考究する上でも示唆に富むものと考えられる。

*1 赤澤真理「源氏物語絵にみる近世上流住宅史論」中央公論美術出版、2010年。

*2 吉田早苗代表「近世公家社会における故実研究の政治的社会的意義に関する研究」文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、2005年、藤田勝也編『院宮及私第図の研究』中央公論美術出版、2007年等が参考になる。

*3 赤澤真理「19世紀における『源氏物語』住宅考証書の成立と展開」日本建築学会計画系論文集、651号、2010年5月。

*4 この点については、さらに詳細な検討を要する。

掲載した図は下記から転載させていただいた。

図1、図2、図4『日本美術全集第19巻近世宮廷の美術』学習研究社、1999年

図3『日本建築史図集新訂第二版』彰国社、2007年

図5『名宝日本の美術桂離宮』第21巻、小学館、1982年

図7『豪華源氏絵源氏物語』学習研究社、1999年

図8 池浩三『源氏物語—その住まいの世界』中央公論美術出版、1989年。

日本文化とロラン・バルトのフォトバイオグラフィー

ファビアン・アリバート・ナルス
(ケント大学及びパリ第3大学院生 外来研究員)

私は、2007年9月よりケント大学及びパリ第3大学の二つの博士課程でフランス近代文学を研究しております。私の研究対象は、Roland Barthes, Denis Roche 及び Annie Ernaux といった3人のフランス人作家によるフォトバイオグラフィー（フォトバイオグラフィー< photobiography >は、自叙伝< autobiography >と写真< photography >を合体させた術語）で、それら作品中における写真の使用のされ方について研究しており、自叙伝、視覚芸術、文学理論に興味を持っております。このたび2009年9月1日から11月26日まで、英国芸術・人文リサーチ・カウンシル（AHRC）から日本に派遣された第一研究団の一員として、国文学研究資料館で研究させていただきました。

国文研での研究

国文研の皆様には温かく迎え入れて頂き、心から感謝いたしております。研究環境も申し分なく、自分の研究目的を十分に果たすことができました。図書館では、書に関する古書の調査および、バルトが独自の日本論を著した『表徴の帝国』（1970年）で言及していた俳句の原書（日本語）の調査のため、松尾芭蕉、与謝蕪村、正岡子規の俳句に関する書籍にあたりました。そして、こうした芸術、美術をバルトがいかに吸収し、理論化したのかについて明らかにするため、作品を写真にも収めました。バルトが自ら実践した視覚芸術（水彩画、デッサン）が、日本伝統の書、及び視覚芸術の影響を多大に受けていたという事実を明らかにしたいと考えていたためです。また、国文研の特別展で写本や画像を目にすることができたことも、今後の研究に大いにつながるものとなりました。

研究活動

国文研での研究期間中、博士論文の中で重要な章（バルトのフォトバイオグラフィーに日本文化がいかに影響を及ぼしたかについての考察）を書き終えることが私の目標でした。フランスで極めて影響力のあった文学理論家、哲学者、作家であったバルトは、1966年から1967年までの間に日本に3度の滞在をしました。この経験から、『表徴の帝国』を著しましたが、その著書の中で、バルトは見慣れた西洋世界から「かなた」にある日本にいかに魅了されたか、さらに、さまざまな側面から日本文化、社会（食べ物、宗教、礼儀など）について書き記しました。バルトは、俳句には現実を捉える力が内在しており、同様に写真にもその力があると主張しています。こうした理由から、俳句は、バルト自身の写真が使用された自叙伝に大きな影響を与えたのです。彼は、俳句、写真、及び彼の自伝的作品には、みな直に現実を捉える力があると述べています。

2009年11月13日、国文研で「存在の表徴性 ロラン・バルトとクリス・マーカ（マルケル）におけるジャパン」というタイトルで研究発表をさせていただきました。内容は、バルトの『表徴の帝国』とマーカ（マルケル）（フランスの映画監督で彼もまた日本に魅了された人物である）のSunless（1982年）との比較考察でした。二人には、日本文化における表徴に対して同じ方向性で取り組んだという点において、共通点が認められます。仮に、バルトとマーカ（マルケル）が日本の表徴が意味するものを理解しなくても、それでもなお表徴するもの有形物質を享受することはできます。この過程で、二人はそれぞれの作品において、詩的で官能的な表徴を文化的意味から切り離して創り出しました。その結果、読者と視聴者は、表徴そのものを肉感的なものとして、そして「記号表現のなかに、<優雅に>（無報酬で）腰をすえた」芸術と文化の「アマチュア（愛好家）」が感情的に享受したもの、として捉えることができるように導いていったのです。

¹ Roland Barthes, 'The amateur', in Roland Barthes by Roland Barthes, trans. by Richard Howard (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1994 [1975]), p. 52.



公開開始 与謝野晶子の源氏訳自筆原稿画像データベース 伊藤鉄也 (国文学研究資料館教授)

与謝野晶子が『源氏物語』の現代語訳をした時の自筆原稿を、国文学研究資料館が画像データベースにしたことを報ずる記事が、掲載されました(2010年2月18日(木)『毎日新聞』大阪版社会面「雑記帳」)。

これは、2月19日から国文学研究資料館のホームページで公開された「近代書誌・近代画像データベース(統合検索)」の中の、堺市(堺市立文化館与謝野晶子文芸館)蔵「与謝野晶子自筆原稿『新新訳源氏物語』」を画像公開することを取り上げたものです。

その新聞記事を、以下に引用します。

◇作家、与謝野晶子(1878～1942)の出身地・堺市所蔵の晶子の自筆原稿=写真・堺市提供=が19日、東京都立川市の国文学研究資料館のホームページ(HP)で公開される。

◇著書「新新訳源氏物語」の原稿用紙522枚分。「桐壺」や「若紫」の巻を現代語訳した際の推敲の跡が多数残る。書籍と表現が若干違い、下書きとみられている。

◇堺市文化課は「生々しい創作の様子が垣間見える。晶子の息づかいまで聞こえてきそう」。資料館HP(<http://www.nijl.ac.jp>)

【山田英之】

国文学研究資料館では、源氏物語千年紀で盛り上がった2008年10月に、京都・鞍馬寺に所蔵されている与謝野晶子の源氏訳自筆原稿(「乙女」「玉鬘」「東屋」)の画像データベースを公開しました。その顛末は、下記伊藤のブログで報告しています。

「鞍馬寺にある晶子の源氏訳自筆原稿」(<http://genjiito.blog.conet.jp/default/2008/04/post-aa85.html>)

この公開が機縁となって、今度は堺市と与謝野晶子のご遺族の方々の理解が得られ、鞍馬寺の自筆原稿(69枚)を補完する画像データベースの公開が実現したのです。

この画像データベースでは、新たに堺市分として、「桐壺」「帯木」「若紫」「末摘花」「紅葉賀」「花宴」「葵」「賢木」「花散里」「蓬生」「絵合」「松風」「玉鬘」「胡蝶」「常夏」「真木柱」「梅枝」「藤裏葉」「若菜上」「若菜下」「夕霧」の522枚が、精細画像で見られるようになっています。

公開直後の2月21日には、堺市立文化館与謝野晶子文芸館で、「与謝野晶子の源氏物語翻訳—自筆原稿がもたらした『新新訳源氏物語』誕生の現場」と題する神野藤昭夫先生の講演会がありました。

神野藤先生のお話は、非常にわかりやすく、またたくさんのお話をいただきました。その内容は、樋口一葉から晶子の知的風土を確認し、晶子の生き様の中からその「源氏物語」の訳業を炙り出すと



いうものでした。堺市所蔵の与謝野晶子自筆原稿「新新訳源氏物語」を読み解きながら、『新新訳源氏物語』の誕生の背景と、その魅力を縦横に語っていただきました。

晶子が11、2歳頃から読み親しんだ本が鞍馬寺蔵の絵入源氏物語小本と思われることや、幻の「源氏物語講義」など、興味深いお話が2時間にわたって続きました。贅沢な時間に身を置くことができ、充実した1日となりました。

これにより、新訳から新新訳への流れが、このお話でつながってきました。また、『源氏物語講義』と『新新訳源氏物語』の時期的な重複の意味づけも、全訳と大胆な訳という差別化を図った晶子(なり)の「源氏物語」への対処の仕方だということも、頷けるところでした。

今回公開された堺市所蔵の自筆原稿をもとにしたお話も、会場のみんなが、その自筆原稿を読んでみたくなるほどの興味を掻き立てる展開となっていました。紫式部に変身して書いた晶子の源氏訳の中でも、今回公開された草稿に溢れる晶子の「源氏物語」に対する魂の軌跡が、この自筆原稿から読み取れる、という指摘は、今後の新しい研究にスポットライトを当てるものでした。

また、鞍馬寺に残る「東屋」の原稿一枚に触れて、中断した晶子訳のその後のものと思われるので、さらに探して欲しいという提案もなされました。

会場には、若い方が少なかったのですが、晶子訳の和歌に注目して、原文の和歌がどう変わっているのかを、調べて欲しいとの問題提起もなされました。

晶子の源氏訳については、ほとんど研究がなされていませんでした。これを機会に、堺市を中心とした機運の盛り上がり(が)が期待されます。

晶子の自筆原稿の画像データベースを公開したことを機に、与謝野源氏がさらに深く読まれ、研究されていくことを期待したいと思います。その意味からも、鞍馬寺と堺市の自筆原稿の画像データベースは、1人でも多くの方に利用していただきたいものです。

このデータベースの公開に関わったものの1人として、さらなる活用がなされることを楽しみにしています。

なお、この講演会については、産経新聞の2月25日日付けで、詳細な紹介がなされました。その一部を引きます。

インターネット上で公開がはじまった自筆原稿は同文化館が所蔵。インクが薄れるなど劣化がみられることから、同文化館が、日本文学の歴史資料のデータ化に取り組む国文学研究資料館に相談し、デジタル画像化と公開が実現した。

(中略)

晶子の源氏物語現代語訳に詳しい、^{かんとう}神野藤昭夫・跡見学園女子大学教授(日本文学)は、今回公開される資料について「これほどの多くの未公開資料があったとは驚きだ。現代語訳というより、晶子自身が一語一語を推敲し、『晶子文学』となっていることを雄弁に物語っており、非常に貴重だ」と評価する。

522枚のうち約480枚は初公開。多くの研究者が推敲過程を分析することで「晶子源氏」の研究が進むことが期待される。

与謝野晶子の源氏訳の意義と背景などについて、さらなる研究の進展が楽しみです。

研究集会「アーカイブズ編成の理論と実践」の開催 坂口貴弘（国文学研究資料館前機関研究員）

年明け早々の平成 22 年 1 月 9 日（土）、公開研究集会「アーカイブズ編成の理論と実践—公文書館の現場からの提言—」が当館第 1 会議室にて開催された。

この研究集会は、当館の研究プロジェクト「アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究」（研究代表者：大友一雄教授、平成 16 年度～平成 21 年度）の主催によるものである。集会は、まず次の 2 本の報告がなされ、その後に参加者を交えての全体討論という流れで進められた。

「記録史料群の編成・構造化に関する理論から実践へ—近代県庁文書群の目録編成を題材に—」

柴田知彰氏（秋田県公文書館）

「沖縄県公文書館における公文書編成について」

大城博光氏（（財）沖縄県文化振興会）

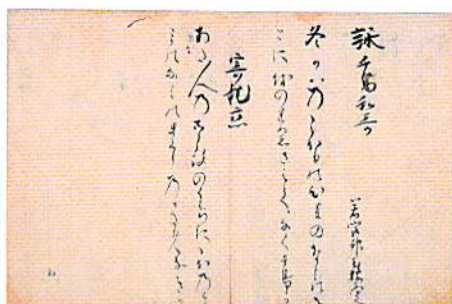
アーカイブズ資料の編成は、目録作成等の前提として必要な実務的作業であると同時に、当該資料群に対する的確な理解・分析があって初めてなりたつ成果でもある。報告者の柴田知彰氏は、各種のアーカイブズ目録編成事例の基盤にあるべき存在として、記録史料群の内的秩序の構成と復元の理論を提起された。巧みな比喩をふんだんに用いながら、編成をめぐる国内外の議論の整理と統合を図る発表であった。大城博光氏は沖縄県公文書館での実践の蓄積に基づき、公文書の編成は単にその整理作業のためだけに必要なのではなく、評価選別やデータベースの構築といった公文書館業務全体にとっても有効な概念であると論じられた。いずれも、従来の研究よりも広い視座から編成論をとらえ直し、その進展の方向性を探ろうとする意欲的な報告といえる。

年始の土曜日にもかかわらず 28 名の方々にご参集いただき、にぎやかな中に活発な質疑が飛び交う研究会となった。今回のテーマを反映してか、国立公文書館や自治体公文書館からの参加も多い一方で、文系・理系の垣根を越えた多様な分野の研究者の方々にも議論に加わっていただくことができた。

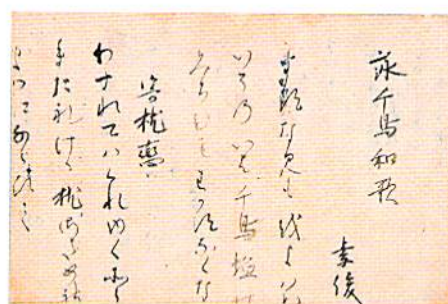
アーカイブズ学の特質を考えると、理論と実践、研究と現場の相互交流は欠かせない。当プロジェクトは平成 16 年の開始当初より、研究成果の普及と議論の深化を目指し、公開の研究会やワークショップを積極的に開催してきたが、今回はその掉尾を飾るにふさわしい会とすることができたと考えている。なお、開催にあたっては日本アーカイブズ学会からの後援をいただいた。また、研究集会当日の資料は、本年 2 月に発行した当プロジェクトの研究成果報告書『アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究』に収録されている。関心がおありの方はぜひとも参照されたい。



当館所蔵「春日懐紙」の重文指定について



【「若宮神主祐定」の二首懐紙】



【「素俊」の二首懐紙】

平成22年3月19日（金）に、当館が所蔵する次の懐紙原本が文化審議会における審議の結果、国の新しい重要文化財に指定するよう、文部科学大臣に答申されました。

■書写：鎌倉時代中期

■資料数：25枚

■請求記号：99-87-1～25

（うち、99-87-4、99-87-5は文化財指定外）

興福寺・春日社を中心とする南都（奈良）の僧侶・神官の歌会で用いられた懐紙の原本です。古筆の名物として名高いもので、詠者は縁弁（7枚）・中臣祐定（6枚）・学詮（5枚）・明算（3枚）・素俊（2枚）で、残り2枚は懐紙ではなく書状です。

春日懐紙は、春日若宮社神主を務める千鳥家に伝わっていたとされていますが、のちに加賀前田家の所有するところとなり、大正年間に巷間に流出したようです。

和歌の研究者として有名な佐々木信綱が研究していた段階で、関戸家蔵の29枚、松岡家蔵の43枚、大鋸家蔵の約50枚といったコレクションの存在が明らかにされていましたが、今日その多くは所在不明となっています。当館に所蔵される春日懐紙は、松岡家蔵の懐紙の一部と推定されています。

また紙背には、詠者のひとりである祐定によって『万葉集』が書写されており、これを春日本万葉集と呼んで珍重されています。寛元元年から寛元2年（1243年～1244年）の書写を伝える奥書があります。各紙中央に折目があり、両端に綴穴の痕があり、時に空押し^{はら}の界線や罫線が見出せるのは、『万葉集』として袋綴本にされていた頃の名残りと思われる。

この紙背によって、当時南都で流布していた『万葉集』本文が知られることは重要です。ただ残念なことに後代には懐紙面の方が尊重される傾向が強まり、その鑑賞の妨げになるという理由で、紙背は多く剥ぎ取られたり、削り取られたりしてしまっています。当館の資料もかろうじてその一部が読み取れる程度ですが、それでも貴重な資料と言えるでしょう。

※本資料は、平成22年4月27日（火）～5月9日（日）まで東京国立博物館本館特別第1・2室で展示されます。

※紙背とは和紙の使用済みの面を反故として、その裏面を利用して別の文書（古文書）が書かれた場合に、先に書かれた面の文書のこと。

平成22年度展示会・講演会等

当館では、平成22年度に次の催しを予定しています。

まず、展示では、4月15日より約二ヶ月間にわたって「和書のさまざま」を行います。これは《本》のさまざまな形態を体系的に示しながら、古典籍がどのように享受されてきたかを御覧いただく展示です。7月5日から約二ヶ月にかけては、国立民族学博物館で昨年に開催され好評を呼んだ「チベット ポン教の神がみ」を、人間文化研究機構の連携展示として実施いたします。さらに、10月4日からは、鉄心斎文庫が所蔵する短冊資料を、これまで行った研究会の成果を踏まえ展示いたします。

講演会は、恒例となっている学界の大家による連続講座（5回）と、昨年に新設して評判のよかったサテライト講座を秋に予定しています。夏休みには近隣の小学生を当館に招いて、国文学の面白さや当館の事業を分かり易く紹介する「子ども見学デー」を催します。

これらの催しについては、HPなどで随時ご案内いたしますので、要項に従いふるってご応募下さい。

展 示	通常展示「和書のさまざま-書誌学入門-」	4月15日(木)～6月18日(金)
	機構連携展示「チベット ポン教の神がみ」	7月5日(月)～9月10日(金)
	通常展示「鉄心斎文庫 短冊優品展」	10月4日(月)～11月12日(金)
講 演 会 等	子ども見学デー	8月
	連続講演	10月～12月
	サテライト講座	11月
	国際日本文学研究集会	11月27日(土)～28日(日)

※今スケジュールは、平成22年4月1日時点のものとなります。

平成22年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会通算第56回）の開催

1. 趣 旨

国文学研究資料館では、アーカイブズ（記録史料）の収集・整理・保存・利用等に関する最新の専門的知識、及び技能の普及を目的として、アーカイブズ・カレッジを開催しています。

2. 期 間

A. 長期コース（東京会場）国文学研究資料館 東京都立川市緑町10-3

前期＝平成22年7月20日(火)～平成22年8月13日(金) 19日間

後期＝平成22年8月30日(月)～平成22年9月24日(金) 18日間

B. 短期コース（名古屋会場）名古屋大学（東山キャンパス）名古屋市千種区不老町

平成22年11月8日(月)～平成22年11月19日(金) 11日間

3. 申込資格

次のいずれかに該当する方です。

- (1) 文書館などの歴史資料保存利用機関をはじめとして、官公署・大学・企業等の文書担当部局及び歴史編纂部局、又はアーカイブズを取り扱う必要のあるその他の機関に勤務し、アーカイブズの収集・整理・保存・利用等の業務に従事している者。
- (2) 大学院在学中又は大学卒業以上の学歴を有する人で、アーカイブズ学に強い関心を持つ者。

4. 受講料

無料（ただし、テキスト代は受講者負担〔500円程度〕）。

5. その他

申込書、及び詳しい情報等については当館 Web ページ(<http://www.nijl.ac.jp/contents/events/index.html>)をご覧ください。また、管理部総務課企画広報係(TEL (050) 5533-2910)までご連絡下さい。

総研大日本文学研究専攻の近況

専攻長 中村康夫

学位授与者今年は3人

3月24日に総合研究大学院大学葉山キャンパスにおいて学位記授与式が行われた。日本文学研究専攻で審査を受け授与された者は以下の3名である。これで、今までに学位を授与されたのは8名になった。

[課程博士]

氏名 金 時徳
論文題目 「異国合戦軍記」の研究—朝鮮軍記物とその周辺—

氏名 一戸 渉
論文題目 上方和学研究

[論文博士]

氏名 石川 了
論文題目 江戸狂歌壇史の研究



昨年12月に一次審査が行われ、今年1月に公開発表会と二次審査が行われて、晴れて合格と認められた。これが2月26日の教授会において認められ、正式に学位授与が決定された。

今回は奇しくもすべて近世文学の研究者で占められた。近世文学研究の苦闘は、その資料の量の多さ、領域の多様さ、それらを厳密に分析することの困難さなど、他の時代とは異なった要因があり、審査も慎重に進められた。しかし、上記3編はいずれもそれらの条件を苦とせず、見事に乗り越えて学位論文に達成されていた。

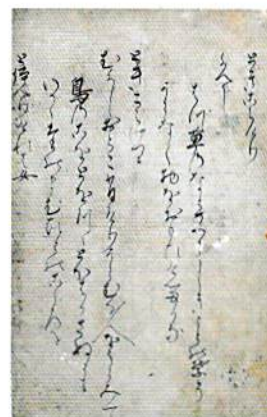
論の高さよりも、資料を緻密に扱っていくその手法は、国文学研究資料館にとっても大変意味のあることであり、今後の研究者を大きく指導するものと思う。

研究者を目指すならば、今や博士の学位は必須となった。日本文学研究専攻は価値高い博士を輩出するべく、カリキュラムを整え、意欲ある新入生の入学を心からお待ちしている。

表紙絵紹介

『伊勢物語 〈いせものがたり〉』断簡

当館所蔵『古筆手鑑』(ラ3—27)1帖に所収される『伊勢物語』の古筆切れ一葉。鎌倉時代前期の筆と目される。書写者などは不明であるが、いわゆる塗籠本の生成過程を物語る資料と成り得る断簡として貴重である。この古筆切れ資料、および所収する『古筆手鑑』については、P3～P5に掲載する久保木秀夫氏の研究ノート「国文学研究資料館蔵古筆手鑑2点の紹介」をご参照いただきたい。



伊勢物語

● 通常展示 和書のさまざま -書誌学入門-

本展示では、《本》のさまざまな形態を体系的に紹介しながら、日本の古典籍がどのように読み伝えられて来たのかをご覧ください。本展示が、書誌学の入門としてのみならず、和書の魅力を感じていただく好機となれば幸いです。

第一部 本を形づくるもの

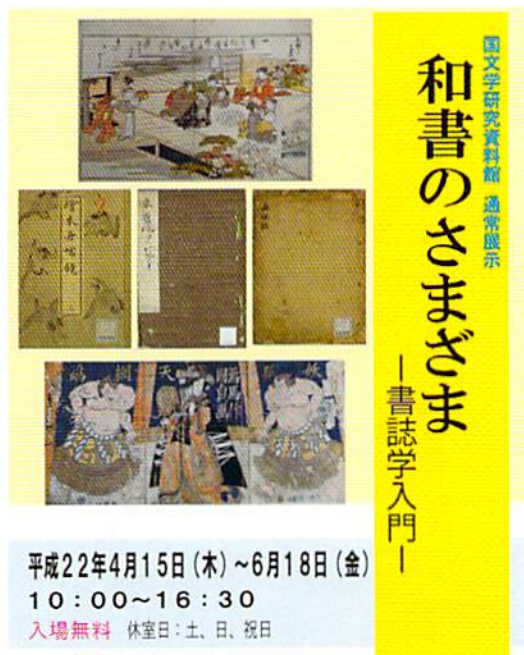
- A 装丁
- B 書型
- C 本の各部
- D 料紙

第二部 さまざまな本の形

- A 写本
- B 版本
- C 本以外の資料

開催期間：平成22年4月15日(木)～6月18日(金)

(期間中 入場無料、開室時間：午前10時～午後4時半、土曜・日曜・祝日休室)



平成22年4月15日(木)～6月18日(金)

10:00～16:30

入場無料 休室日：土、日、祝日

主催：国文学研究資料館

お問い合わせ：050-5533-2900(代)

所在地：〒190-0014 東京都立川市緑町10-3 <http://www.nii.ac.jp>

● 閲覧室カレンダー 2010年4月～6月

■青は休館日 ■黄色は土曜開館日

4月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

5月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

6月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

開館 9:00～18:00 請求受付 9:30～12:00 13:00～17:00 複写受付 9:30～16:00
 ただし、土曜開館日は、開館 9:30～17:00、請求受付 9:30～12:00 13:00～16:00
 複写受付 9:30～15:00



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成22年4月26日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷所 三鈴印刷株式会社

©人間文化研究機構国文学研究資料館